

[書評論文]

澤田治美著『モダリティ』

東京：開拓社 2006. pp.xviii+523 ISBN4-7589-2131-8

柏 本 吉 章

1. はじめに

モダリティは、哲学・論理学における命題計算の演算子としての概念から、自然言語の意味論における人の心理表現としての概念、さらには、発話場面の中での発話者による言語行為のあり方に関わる概念まで、きわめて幅広い領域において観察、研究されている現象である。本書著者の喩えによると、モダリティは「心と世界を結ぶ見えない糸」であり、その多面的抽象的性格を解明しようとするモダリティの研究もまた、多岐にわたるものとなっている。本書は、この広範囲に及ぶモダリティ研究の流れと実態を掌握し、その綿密な解釈の上に立って、日英語のモダリティに関わる諸問題に対して精緻でかつ説得力のある論考を展開するものである。モダリティの研究全般にわたる幅広い問題提起と偏りのない多角的な視野による本書の議論は、モダリティの全体像の解明という目標に向けて多大な貢献を成す研究であると言える。

本書の18章から成る内容は、次の5つの部に分けて展開されている。

- 第Ⅰ部 モダリティに関する理論的な問題をめぐって
- 第Ⅱ部 モダリティの多義性と現実性・仮想性をめぐって
- 第Ⅲ部 認識的モダリティと存在的モダリティをめぐって
- 第Ⅳ部 束縛的モダリティと言語行為的モダリティをめぐって
- 第Ⅴ部 自発的モダリティ、感情的モダリティ、そして未来性をめぐって

以下、順を追って各部各章の内容を概観したい。

2. 本書の内容

第Ⅰ部「モダリティに関する理論的な問題をめぐって」においては、議論の出発点として多面的なモダリティ研究に必要な種々の基本概念やこれまでの研究の流れが概観されている。

第1章「モダリティへのアプローチ」では、冒頭にある「モダリティはどこから来たのであろうか、モダリティはどこへ行くのであろうか、そして、モダリティとは何であらうか」という著者の問いによって示されるように、幅広い概念としてのモダリティの切り口をどこに定めるべきかという課題に対して、その手がかりとなる諸問題が取り上げられ、モダリティ研究の目指す所が検討されている。

第2章「モダリティ分析のための基本概念」では、まず論理的な概念としてのモダリティの定義に深く関わる「命題」や「事象」といった概念とそれに付随するモダリティの分類法などが確認されている。また、自然言語におけるモダリティの分析にとって重要な概念の一つとなる「主観性／客観性」の区別、さらには、発話場面の中での言語行為としてのモダリティの性格づけまで、さまざまな次元でのモダリティ研究に不可欠な諸概念の意味や有効性が論じられている。

第3章「英語におけるモダリティ研究の流れ」では、英語のモダリティ表現の研究経過を概観し、「根源的」と「認知的」という分類法の扱いを中心として、Rossの「本動詞説」から、Sweetser (1990) による認知言語学的分析にいたるまでの1970年代以降のモダリティ分析の変遷を振り返っている。

第Ⅱ部「モダリティの多義性と現実性・仮想性をめぐって」においては、モダリティ、仮想性、過去時制といういくつかの意味要素が関わりをもつ「could+完了形」の構文について、さまざまな角度からの分析が提示されている。モダリティの対象となる「状況」についての現実性／仮想性という概念、また、モダリティそのものの性質としての主観性／客観性の概念などを考察対象とし、その議論によってモダリティ表現の持つ多義的性格が明らかにされている。

第4章「『could+完了形』構文における7タイプの多義性」では、命題と事象、言語行為と態度、主体性と客体性、現実性と仮想性といった概念の対立を用いて、「could+完了形」構文の多義性の体系を明らかにしている。

第5章「『could/might/must+完了形』の表すモダリティ」では、法助動詞と完了形を組み合わせた類似の構文の意味機能を検証するため、アガサ・クリスティの作品から各種の事例を引用し、その解釈の中でこれらの構文間の意味的相違を例証している。

第6章「状況の分類と仮定的条件文におけるモダリティ」では、仮定的条件文の後に続く帰結節での「could+完了形」構文の働きについて分析し、事象的モダリティと認知的モダリティの仮想世界への関与のあり方の違いについての一般化を導き出している。

第7章「状況の『現実性／仮想性』とモダリティの『主観性／客観性』・『主体性／客体性』」では、状況の「現実性／仮想性」の対立とモダリティの「主観性／客観性」・「主体性／客体性」の対立の関わりを論じ、主観的な認知的モダリティが、時制や仮想性によって基盤づけられた「作用」をさらに認知的に基盤づける働きをするという「二重基盤づけ」の

一般化が提案されている。

第8章「モダリティの認知意味論と語用論」では、Sweetser (1990) の力のダイナミクスによる多義的アプローチをはじめとする認知理論の導入を評価し、法助動詞の分析における「力」に関するイメージスキーマの有効性を論じている。これらの枠組みに基づくモダリティへの多義的アプローチの採用を訴えると同時に、モダリティの諸現象が認知意味論と語用論の接点に位置するものであることを明らかにしている。

第Ⅲ部「認知的モダリティと存在的モダリティをめぐって」においては、「認知的」と「存在的」という類似する二種類のモダリティを取り上げ、推論パターン、命題内容条件、モダリティと否定の関係といった視点から二つのタイプのモダリティの相違についての考察が行われている。また、推論パターンの違いに基づく認知意味論的アプローチが、英語のみならず日本語のモダリティ表現にも当てはまるものであることが指摘される。

第9章「推論のパターンと認知的モダリティ」では、Sweetser (1990) 他による認知意味論的イメージスキーマの考え方を紹介し、「断定型」と「予測型」に分類できる認知的モダリティの区別が日本語にも当てはまる普遍性を有するものであることが論じられている。

第10章「存在的モダリティと認知的モダリティの間」では、法助動詞 can の用法について、その存在的意味 (= 散在性) における「状況」の非特定性に注目し、普遍的条件としての「散在性の条件」を提案して、存在的 can が示す文法的意味的特徴を説明している。

第11章「認知的モダリティの命題内容条件」では、存在的 can と認知的 can の違いに焦点を当て、認知的モダリティの特徴として、それが対象とする命題についての命題内容条件のほかに、定性の条件、現在性条件、現存性条件などの制約があることを論じ、さらにその諸条件の間には認知的な階層性が見られることを指摘する。また、認知的 can の例外的ふるまいを説明するために、客観的な認知的 can (= 可能性) が「非確言的」な環境において主観的な認知的モダリティに転化するという「主客転換の原則」を提案している。

第12章「認知的不可能性におけるモダリティ否定と命題否定」では、モダリティ否定となる can't / 「はずがない」と命題否定となる must not (mustn't) / 「ないに違いない」の二種類の否定表現には、それぞれに既存命題否認の条件と否定命題断定の条件が適用されるとし、同一の状況をモダリティ否定で表現するか命題否定で表現するかは、話し手の心的態度によって左右される語用論的な問題であることを指摘する。

第Ⅳ部「束縛的モダリティと言語行為的モダリティをめぐって」においては、束縛的モダリティの本質を理解するために「動機づけ」の概念が重要であることが主張され、さらにモダリティの言語行為的分析への発展の可能性が論じられている。

第13章「束縛的モダリティと動機づけ」では、義務や許可の出所としての「動機づけ」の概念の有効性が論じられ、さらにはそれが認知的モダリティや言語行為的モダリティにも適用可能な概念であることが示唆されている。また、束縛的モダリティが依存する「動機づけ」

の概念は、認知やコンテキストとも関わる語用論的な概念であることが指摘される。

第14章「束縛的モダリティとしての二つの need」では、本動詞の need と法助動詞の need の種々のふるまいの違いを観察し、その違いが現実世界そのものを叙述することと現実世界に対する判断や働きかけを表現することという、「必要性」の概念の二種類のあり方を反映するものであると分析する。この need の性質は、法助動詞の本質的な機能が、話し手の主体的な判断や働きかけを表出することにより、世界に対する人間の経験を映し出すものであることを裏付ける有力な証拠となると論じられている。

第15章「言語行為的モダリティと認識的モダリティの間」では、英語の “may/might ~ but” 構文の多義性を分析し、「是認」という言語行為的概念と「可能性」という認識的概念が本質的に性格を異にするものであることを指摘する。その区別の上に立って言語行為的モダリティの表現としての是認の may についての説得力のある分析が提示されている。

第V部「自発的モダリティ、感情的モダリティ、そして未来性をめぐって」においては、英語のモダリティ分析における「自発性」の概念の導入を提案し、また、感情的モダリティ・評価的モダリティの概念の有効性、さらには未来性とモダリティの接点となる表現などが論じられている。

第16章「日英語における自発的モダリティ」では、知覚表現、感情表現と共起する can に見られるモダリティの意味特性が、日本語の対応表現に見られる「自発性」の意味カテゴリーに当たるものであると主張し、自発的モダリティの概念が日本語同様に英語の法助動詞の意味論においても有効な概念となることが論じられている。

第17章「感情的モダリティと心理的衝突」では、願望や評価を表す may や should を感情的モダリティの表現と分類している。そのうちの評価的 should は、評価主体の想定や世界観と衝突する事柄を表すという点において「可能性」のモダリティと共通する意味要因があることを指摘し、感情的モダリティと認識的モダリティが根底において一つにつながるものであることが示唆されている。

第18章「未来性からモダリティへ」では、モダリティと未来性の融合という視点に立って、“WILL/SHALL BE ~ ING” 構文に見られる複数の意味タイプのうち、「ことの成り行き」を表すタイプのものは、状況に対する話し手の捉え方や聞き手に対する心的態度が色濃く反映されるものとして、未来性とモダリティが融合した構文であると結論づけられている。

3. 議論

本節では、上で紹介した本書の大部な内容の中で、特にモダリティの概念の記述における意味論的視点と語用論的視点の接点となる領域に焦点を当て、モダリティと言語行為の関係を中心として、発話場面の中でのモダリティの役割について若干の議論を加えたい。

3.1. 主観性と言語行為

本書の中でも各所の議論において、モダリティを意味論と語用論が接する境界的領域の概念であると位置づけている。その中で、意味論的分析と語用論的分析をつなぐ重要な鍵となるのが「主観性」という概念である。

第2章において、モダリティについての各種議論のための基本的概念を確認する作業の中で、「主観性／客観性」の区別が取り上げられている。そこでは、表現の「主観的意味」を「発話時における話し手の心的態度、立場が含まれる場合」とし、また、表現における「話し手の関与」(the speaker's involvement)であると定義づけている (p.43)。

モダリティそのものの定義においてもしばしば用いられる「話し手の心的態度」あるいは「話し手の関与」といった概念は、いずれも確固とした意味カテゴリーを捉える概念とはいえないものである。しかしながら、モダリティの本質そのものが、このようなゆるやかな概念による記述がふさわしいものであるとするならば、このあいまいさを含む定義づけも必ずしも不適切であるとは言えないことになる。

第7章では、「現実性／仮想性」の概念と「主観性／客観性」の概念の関係が論じられている。その中で、著者は Palmer (1979) によるモダリティの分析に言及し、認識的モダリティが、発話時における判断を表すものであり、「ある意味で『遂行的』(performative)である」との議論を引用している。また、この Palmer の分析では束縛的モダリティについても、発話時における話し手の命令や許可、禁止といった言語行為を遂行するものであるとされる (pp.144-145)。本書著者によるモダリティのアプローチでは、これらの記述はモダリティの主観的な意味のみに当てはまることになるが、各種モダリティに見られる主観性が、言語行為との密接な関係をその本質としていることは間違いないと言えるだろう。

モダリティ分析の認知言語学的アプローチとして著者がその枠組みを援用している Sweetser (1990) は、語の意味の三つの領域として現実世界領域、認識領域、言語行為領域の区分を想定し、法助動詞の意味は基本的にこの三つの領域において多義的となりうると考えている。この枠組みの中で著者は、法助動詞の根源的用法が一律に現実世界を叙述しているとする Sweetser の考えに異を唱えている。その遂行的用法の存在を念頭において、「法助動詞の本質的な機能は、世界そのものを叙述するというよりは、世界に対する主体的な判断や働きかけを表出することにあるとみなせるであろう。そうした判断には『断定』や『予測』があり、そうした働きかけには、『許可』、『命令』、『提案』、『申し出』、『要求』などさまざまな言語行為がある」と論じている (p.350)。

これらの議論から明らかになるように、本書では、現実世界と話し手を結びつけるものとしての主体的な判断や働きかけを表出することを「主観性」という概念で記述し、それがモダリティの本質の一部となると捉えている。そして、その「主観性」の中には、発話場面における言語行為の「遂行性」という性質も含まれることになる。言語行為的モダリティはも

ちろんのこと、モダリティ全般についてその主観的用法と言語行為が密接な関係をもつことをあらためて確認しておきたい。

3.2. 可能世界の意味論から対人世界の意味論へ

最後に、本書でのモダリティの議論を逸脱することにもなるが、モダリティの言語行為的機能からさらに発展する形として、発話場面の対人関係の中でのモダリティの役割について考えてみたい。

モダリティ表現が映し出す可能世界の意味論は、対人的コミュニケーションにおいてしばしば求められる繊細な心理描写の手段として機能し、また、モダリティによって表出される話し手の心態は、同時に発話場面の中での対人的相互作用の操作においても重要な役割を果たすものとなる。

モダリティの概念は、いくつもの次元での観察・分析が可能なものであるが、言語的モダリティの分析は次の二つの次元での記述に集約することができるであろう。

まず、文の成分としてのモダリティは、可能世界の意味論を反映するものとして、命題や事象のさまざまなあり方を捉える働きを持つものである。また、同時にそれは文の外延としての真理値の確定を妨げる要素でもある。

一方、発話の成分としてのモダリティは、発話場面の中の言語行為のあり方を捉えるものとなる。また、文レベルでの分析と同様にそれは発話の外延としての言語行為の確定（＝遂行）を妨げる要素となると理解される。

文と発話という二つの異なる次元でのモダリティの働きには、明らかに Sweetser が提唱するメタファーとしての機能の写像があると考えられるが、一方で二つの次元のモダリティの性格づけは、同一の現象を表裏から捉えているものに過ぎないとも考えられる。

発話に含まれるモダリティは、言語行為の遂行に関与し、聞き手への働きかけの力を調節する機能を持つものである。時制や相といった、動詞部分にまつわる他の文法範疇にも、類似の働きは見られるが、モダリティが示す言語行為的働きかけへの関与は、可能世界の論理というその本来の意味に裏打ちされた本質的機能である点が大きな特徴となる。文レベルでの可能世界の様相の表現と発話レベルでの言語行為の調節の表現は、表裏一体の一つの言語機能であると言える。

論理の世界での様相の意味論は、発話場面の中での「対人関係の様相」の意味づけにも影響を与えるものとなる。モダリティ表現の中で、仮定法が「非現実性」の表現という本来の働きを失い、「ていねいさ」や「如才なさ」といった対人的意味の表現へとその機能を移している。同様の機能の変化は、対人的婉曲表現として多用される法助動詞においても広く観察されるものである。人間心理の様相を映し出すことばとしてのモダリティは、人間関係の様相の操作においても大きな意味を持つものとなりうる。モダリティについての研究も、この

対人関係的機能の的確な記述を目指す方向へと力点が移っていくことになるのかもしれない。

4. おわりに

言語のあらゆる次元での要因が関わるとも言えるモダリティの研究においては、その意味論的考察に加えて、論理学、認知理論、言語行為論など、隣接する領域との関係を見失うことなく、常に幅広い視野でその議論が行われなければならない。本書における偏りのない広汎な問題意識と多角的な視点に立つ各種の議論は、日英語のモダリティ研究の今後の展開に向けて大きな影響を及ぼすものとなるだろう。

参考文献

- Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm. [澤田治美 (訳) 1992. 『英語法助動詞の意味論』東京: 研究社.]
- Huddleston, R. and G.K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 柏本吉章. 2000. 「法助動詞の論理的意味・心理的意味・対人関係的意味」、成田義光・長谷川存古 (編) 『英語のテンス・アスペクト・モダリティ』197-209. 東京: 英宝社.
- Leech, G.N. 1987², 2004³. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- 中野弘三. 1993. 『英語法助動詞の意味論』東京: 英潮社.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』東京: 大修館.
- Palmer, F.R. 1979. *Modality and the English Modals*. London: Longman.
- Palmer, F.R. 2001². *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Perkins, M.R. 1983. *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter.
- 澤田治美. 1993. 『視点と主観性－日英語助動詞の分析－』東京: ひつじ書房.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. [澤田治美 (訳) 2000. 『認知意味論の展開』東京: 研究社.]